



伊地知文庫
文庫20
268
2



草庵和歌集卷之第四

伊地知氏書冊

秋上

聖護院二不法親王家一首早秋

しる葉のふもよもよも吹くそと秋の風は秋の味

入道前太政大臣家三首初秋

あけのよの朝の原とてを流るる水も秋の味

摺吟百首

とそそくともや吹くそと秋の味は秋の味

彈正平親之家五首初秋

ひあけの朝の原とてを流るる水も秋の味

二條入道大納言五首初秋

この日の朝の原とてを流るる水も秋の味



清原大納言家三首 月夜

あはれなる露をけしけり 秋のやわらけの音のささるる

氏 御家七夕七首 小朝初秋

秋の世のしのむ 秋の音をきく 露のたれをしのむ

月家百首 一

月夜 月夜 月夜 月夜 月夜 月夜 月夜 月夜

兵庫長赤家 野露

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

清原大納言家 百首 一

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

月家 百首 一

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

花山院大納言家 三首 七夕 露

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

茅相院 贈左大臣家 七首 七夕 雲

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

七夕 橋

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

七夕 月

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

左大臣家 七夕 七首 月夜

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

贈左大臣家 三首 七夕 河

あはれなる露をきく 白露の玉をきく

たのむるは心よきものなりけり
おの里よりよきもの病に音し
秋の葉の音せむを思ふ
右大臣家七首の秋風

秋風

まきの袖の秋にしは秋の心
秋の心よきものなりけり

夜秋

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

海色秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

野秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

清子と大洞と秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

右衛門佐和義朝と秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

小鷹持紙

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

清子と大洞と秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

季長と秋風

秋の心よきものなりけり
秋の心よきものなりけり

甚任おれんはく新比海草のうへうらあ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

二條八道大綱云々十首のあふれ花

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

今よりあふれりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

彈正平親之家お首あ合のあ花露

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

亦用白あふれ秋花也

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

摺吟百首

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

あふれりつゝとあつりあつるもこの指の秋はあふれ

渡辺の春朝あつる野信あ

源大納言俊範等合々秋夕

兼惠信師并合々野郎秋夕

藤州白敷合々秋夕

少子左大臣公直十首合々秋夕

義久合々秋夕

長門御殿十首合々秋夕

等物院贈友右衛門合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

新古今和歌集合々秋夕

ゆりのけあまのしんまのむかひからかたる
鹿聲竹方より三ノ段

いよいよのけのむかひのむかひのむかひのむかひ
不孝え寺のてん原ぞ

孫とてその秋海をいひけり今鹿の音とつる
大膳大支頼康佐女牛共のそとあやせ

一ノ野原
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

金草寺の首のてん
秋の草のむかひのむかひのむかひのむかひ

弾正平親のむかひのむかひのむかひのむかひ
ゆきのむかひのむかひのむかひのむかひ

野原

あまのむかひのむかひのむかひのむかひ
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

あまのむかひのむかひのむかひのむかひ
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

あまのむかひのむかひのむかひのむかひ
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

あまのむかひのむかひのむかひのむかひ
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

あまのむかひのむかひのむかひのむかひ
あまのむかひのむかひのむかひのむかひ

夕暮

あはれなるもよみかたのつらきもの

清い方大綱を授けしその月前初春

あはれなるもよみかたのつらきもの

中護院のあはれなるもよみかた

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

あはれなるもよみかたのつらきもの

草庵和歌集卷第五

秋并下

妙法院三和法親上良月十五夜十首一首言侍侍

夜くはりほいほ秋のあふふと風よもほのりて

流るる入道大徳云夜十首の月十の夜

夜の親とりのあふふと風よもほのりて

金蓮寺にて詠はるるあふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

河原

あふふと風よもほのりて

月

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

あふふと風よもほのりて

如法院家十のそり合渡月

実情のゆゑに月半のそり合渡月

華回月

味方夜半のそり合渡月

中陰院入道親し由三のそり合渡月

そり合渡月

権井二京は親し由三のそり合渡月

そり合渡月

和奇百三首海月

伊豫のそり合渡月

寺務院贈る由三のそり合渡月

そり合渡月

彈正親王由三首海月

そり合渡月

法京高僧由三のそり合渡月

そり合渡月

贈る由三のそり合渡月

そり合渡月

心

そり合渡月

二條入道大御由三のそり合渡月

そり合渡月

贈る由三のそり合渡月

そり合渡月

そり合渡月

海多月

白雲(雲)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりてわたりて

海多月

うたはし(うた)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

海多月

はる(はる)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

古き月

あつ(あつ)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

海多月

あつ(あつ)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

海多月

あつ(あつ)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

あつ(あつ)の如くあはれぬ海多月の如くわたりたりてわたりてわたりて

積改守者相き久信 小里也

身かきしなまふらふもあつゝあつゝまふらふもあつゝあつゝ
贈友長安あつゝ月形結を

贈友長安あつゝ月形結を
田家月

我門のついで田のついでついでついでついでついでついでついで
らのもついでそのついでついでついでついでついでついでついで
獨吟百首下

秋の田のついでついでついでついでついでついでついでついで
田家月

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
不都志言唐室あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
元慶上あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

思ひついでついでついでついでついでついでついでついでついで
左馬門佐 和義雅言 家あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
入道前大政大臣あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
二条大納言小飛大納言あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝ

清子入道大酒之妻やそ月前番より一
山邊にやういふいふる月こまりそら
のついでに
長秀妻やそつ穂月殿が

月氣のよきやういふいふる月こまりそら
のついでに
彈正親之妻や首晚月

と花入はんのよきやういふいふる月こまりそら
のついでに
贈大長妻や首一初番

入そいふのよきやういふいふる月こまりそら
のついでに
河番

やあまやういふいふる月こまりそら
のついでに
清子大酒之妻やそつ渡番が

田之巻

清子大酒之妻やそつ渡番が
のついでに
よそあはれの日氣の道場よきやういふいふる月こまりそら
のついでに

清子大酒之妻やそつ渡番が
のついでに
馬御妻八月十五首の湖と秋番

よそあはれの日氣の道場よきやういふいふる月こまりそら
のついでに
人あはれのよきやういふいふる月こまりそら
のついでに

よそあはれの日氣の道場よきやういふいふる月こまりそら
のついでに
杖見出のよきやういふいふる月こまりそら
のついでに

よそあはれの日氣の道場よきやういふいふる月こまりそら
のついでに
梶井宮哥合の河番

よそあはれの日氣の道場よきやういふいふる月こまりそら
のついでに
馬御妻十首の湖と秋番

胡齋

勢す花吹雪の音にまかせたての
月夜をぬきつゝ

おののこよの梅おのしづか
二條大納言おののこ野鶴

記りしつては
獨吟百首

お花のうらみ
夏すゝめ百首

月夜をぬきつゝ
二條入道大納言長おきる

お花のうらみ
夏すゝめ百首

彈正忠三首月夜梅文

おののこよの梅おのしづか

左近之佐和義親三首梅文

おののこよの梅おのしづか

平權院二首親と史平首

おののこよの梅おのしづか

彈正年親と史平首梅文

おののこよの梅おのしづか

月夜梅文

おののこよの梅おのしづか
人々金蓮寺のうらみ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

秋あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

構あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

清い方大調あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

黒構あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

周あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

父あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

心あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

二條大調あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

周あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

序あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

花院入道大調あけ

あつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとてあつたきとふらふらとて

二條入道大弼云或歌波小首海名梅衣

かまのよしの海に身をまきしう治りゆくはなは
あはれ

梅衣

見よとていふは世も秋の葉も多そあなは
あはれ
あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

なごしとていふは世も秋の葉も多そあなは
あはれ
あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

前大政大臣家小菊

は市洋弁月次三首月あ菊
あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

前大政大臣家小菊

あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

贈大政大臣家小菊

あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

金蓮寺にて秋あはれ

あはれなる世に志はかきくはあはれ
あはれの世に衣はあはれ

秋田

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし
秋田の山々をめぐりて
大森野の山に
多しをたむけし

不都光寺にてありし作の紅葉

しとれは花の紅葉はしらりねもいもあはれ
秋の忠に誰かゆは信昔神の國をせられは
葉のあはれはしらりねもいもあはれ

しとれは花の紅葉はしらりねもいもあはれ

金葉寺にて月前植

霧のたけはしらりねもいもあはれ
清子大納言女十女首の月前紅葉

そついでに錦もあはれはしらりねもいもあはれ
並好斎室のまうらてありし作の昔秋月

志のたけはしらりねもいもあはれ

續千載集巻後心のら撰者信吉秋のまうら

女首千海をしらりねもいもあはれ

のらついでに錦もあはれはしらりねもいもあはれ

獨吟百首

しとれは花の紅葉はしらりねもいもあはれ
昔秋のあはれ

わらわのあはれはしらりねもいもあはれ

小倉宰相中将史三首

野の山をあらはしつる昔のあはれはしらりねもいもあはれ

暮秋

花のあはれはしらりねもいもあはれ
うらは秋のあはれはしらりねもいもあはれ

前用はあやせ九首あやせのうた
あやせのうたあやせのうたあやせのうた
贈左大臣家三首下河九首
あやせのうたあやせのうたあやせのうた

草庵和歌集卷第六

冬三首

清子左大臣家三首初冬

あやせのうたあやせのうたあやせのうた

小野社三首下河

あやせのうたあやせのうたあやせのうた

二條大弼云家三首初冬崎

あやせのうたあやせのうたあやせのうた

あや

あやせのうたあやせのうたあやせのうた

等稻院贈左大臣三首

あやせのうたあやせのうたあやせのうた

左衛門尉和義親頼よりて尋きてあつきたりし時

志願しよとていふはむしつりすりそりり

寺持院贈左大臣兼大納言時

杉のそと吹のこころは吹らばはるし

大膳大夫兼京東あやれ時

志願しよとていふはむしつりすりそりり

重権院二重法親王あやれ一首

花の白くはむしつりすりそりり

清子大納言兼十首あやれ一首

あやれ一首はむしつりすりそりり

風前時

山吹の吹はむしつりすりそりり

あやれ一首はむしつりすりそりり

まらぬはむしつりすりそりり

寺持院贈左大臣あやれ一首

吹まらぬはむしつりすりそりり

刑部卿廣の部あやれ一首

あやれ一首はむしつりすりそりり

馬守卿あやれ一首

那智のあやれ一首はむしつりすりそりり

金堂寺あやれ一首

うたはむしつりすりそりり

あやれ一首

冬来りしはむしつりすりそりり

海色付由

うらやまのあまのなをのこしは海の色もあまのこころも
位吉社百番予合の落葉

神音のよのふれ葉のこころもあまのこころも
獨吟百首下

夕陽のこころもあまのこころもあまのこころも
贈友大友あまのこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
今逢春十そ予合の

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
彈正親のあまのこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
初落葉

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
源光政のあまのこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
落葉

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
神音のよのふれ葉のこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
清のよのふれ葉のこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
あまのこころもあまのこころも

あまのこころもあまのこころもあまのこころも
中権院のあまのこころも

紅葉のあはれ海舟の海舟のつらさのたぐひのたぐひのたぐひ

紅葉

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

紅葉

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

法皇御成

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

ふらふらと風が吹く紅葉のたぐひのたぐひのたぐひ

杜若草

この草の葉は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

冬月

冬月の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

冬月の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

綱代

綱代の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

綱代の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

綱代の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

綱代の草は花の葉と異なり、花は赤く、葉は青く、
冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。花は白く、
葉は青く、冬に花を咲かせ、春に葉を茂らす。

あまのこころをよめることなし

歌次郎

あまのこころをよめることなし

あまのこころをよめることなし

歌

あまのこころをよめることなし

金葉歌

あまのこころをよめることなし

贈友人書

あまのこころをよめることなし

初夜

あまのこころをよめることなし

日昔法三首

あまのこころをよめることなし

清子大御

あまのこころをよめることなし

梶井

あまのこころをよめることなし

小倉宰相

あまのこころをよめることなし

平權院入道

あまのこころをよめることなし

池水

あまのこころをよめることなし

河子大綱云句十首卷

為多の河子大綱云句十首卷

夜火を

とくも夜火をの河子大綱云句十首卷

二条大綱云句十首卷

金華寺の河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

河子大綱云句十首卷

志はつた女にあらはれしは

大邦高き事なりしは

今もあはれしは

今もあはれしは

昔はあはれしは

行書

昔はあはれしは

行書

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

昔はあはれしは

不孝老の少く年々ゆる

久の好の本と思ふもいふにたけなかりけり家の事と

贈方大臣忠女首勝音

その親のあつらへたてと見ればそのあつらへたては

清子方大臣忠女首勝音

と親のあつらへたてと見ればそのあつらへたては

白書社三首年合

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

大膳大夫忠女首勝音

尾のあつらへたてと見ればそのあつらへたては

贈方大臣忠女首勝音

と親のあつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

白書社三首年合

あ

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あ

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

あつらへたてと見ればそのあつらへたては

おのつゝいふことごとく一はさかたに今朝もついでに夜は
浅き

親事におもひ給ひてのこころいふはあつたはるる
金邊寺并合の務書

しんりんすまゝいふはあつたはるる
何れも書

見り野もあつたはるる
民の御事起りしつゝあつたはるる

用事なれあつたはるる
野卯書

今これのおろしはあつたはるる
入道聖大政大臣あつたはるる

中権院の事あつたはるる
中権院の事あつたはるる

源大納言あつたはるる
源大納言あつたはるる

野卯書
野卯書

あつたはるる
あつたはるる

あつたはるる
あつたはるる

あつたはるる
あつたはるる

あつたはるる
あつたはるる

平ら海にさし移る

若くはくさし移る海をくさし移る

用務書

大抵はし海に移る海をくさし移る

西戸の浦に移る

海に移る海をくさし移る

浦書

海に移る海をくさし移る

海に移る海をくさし移る

海に移る

海に移る海をくさし移る

海に移る

海に移る海をくさし移る

海書

海に移る海をくさし移る

海に移る海をくさし移る

浦書

海に移る海をくさし移る

海に移る海をくさし移る

海に移る

海に移る海をくさし移る

海に移る

海に移る海をくさし移る

海に移る

みへうまをたてしをいふまの昔もむくむく
萬曆二年一月也

此はかの時の様もむくむくむくむくむくむくむくむくむく
贈大友貞政首の鷹狩

あつちをむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく
かたむきしむくむくむくむくむくむくむくむくむく

奉りかたむきむくむくむくむくむくむくむくむくむく
那むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

ふくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく
この時におもむくむくむくむくむくむくむくむくむく

むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく
ふくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

二條大納言貞政首の鷹狩
此の時におもむくむくむくむくむくむくむくむくむく

奉りかたむきむくむくむくむくむくむくむくむくむく
功業やうまむくむくむくむくむくむくむくむくむく

むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく
晴くむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

贈大友貞政首の鷹狩
むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

奉りかたむきむくむくむくむくむくむくむくむくむく
むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

前奉りかたむきむくむくむくむくむくむくむくむくむく
むくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむくむく

そ云

應永七年春以河内筆一正
書寫之校勘畢

書月 抄

三平 巻

初抄の目録の
初抄の目録の
初抄の目録の

初抄の目録の
初抄の目録の
初抄の目録の

初抄の目録の
初抄の目録の
初抄の目録の

初抄の目録の
初抄の目録の
初抄の目録の



